様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２５日現在

研究種目：若手研究 A
研究期間：2006-2008
課題番号：１８６８１０３６
研究課題名（和文）　西アフリカにおける精霊の森を含む景観の歴史的成因と生物・文化多様性の保全
研究課題名（英文）　Landscape formation around sacred forests and conservation of bio- and cultural diversity in West Africa.

研究代表者　山越 言（YAMAKOSHI GEN）　京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：　００３１４２５３

研究成果の概要：
ギニア共和国南東部の森林地域では、焼畑耕作を主生業とする農耕民が、精霊の森や他の儀礼の森を村落周辺に維持することで、独自の農村景観を形成している。これらの森林の構成や機能について、植民地期以降の変化を利用可能な実証的資料に基づき明らかにした。実証資料のない時代に関する口承知識も重ね合わせ、豊かな在来知識と積極的な維持改変への関与の痕跡など、村落周辺林の形成や維持に関する住民の深い関わりを見いだすことができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
１８年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
１９年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
２０年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
総　計	18,600,000	5,580,000	24,180,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：　野生動物、熱帯林、アニミズム、在来知、鎮守の森、ギニア、チンパンジー

１．研究開始当初の背景

熱帯アフリカ地域の森林は、地域の人々にとってはその生計を依存し、将来の地域発展のための基盤となることが期待される重要な資源であるが、同時に貴重な動植物の生息地としての重要性が国際的に声高に叫ばれている「最後の楽園」でもある。このような利用か保全か、という解決困難な状況の中、持続可能な形での長期的な将来像を描くためには、当該地域にとってどのような景観が望ましいのか、そこにどのような森林が残されるべきなのかについて、検討することが不可欠である。

しかしながら、景観、とくに森林に対する認識は極めて地域文化や歴史経験に依存的であることが指摘されている。例えば西欧において、中世までは悪霊が跋扈する恐ろしい場であった山岳森林が、近代化とともに審美の対象となるとともに、征服すべき処女地というイメージへと大きく変化した。また、西アフリカ・ギニア・キシドゥグ地域の森林・サバンナ遷移帯に特徴的に広がる、村落の周囲を取り囲むドーナツ型の森林パッチの成因に関して、外部者と地域住民の間で景観認識が大きく異なっていることが指摘されている。植民地時代からフランス人行政官や研究者は、この地域の森林を焼畑によって破壊してきた地域住民が、残されたわずかな森林

の真ん中に村を設立して、最後の森さえも破壊し尽くそうとしていると認識してきた。いっぽう村人側は、このような森林はもともと彼らの祖先がサバンナの中に村を設立した時に植樹した有用樹のまわりに発達してきたものであり、むしろ最近は一貫して森林は増加していることを認識していた。

このような景観認識の差異は、単に生態学上の興味深い問題であるだけではなく、保全政策の成否に大きな影響を与える重要な問題でもある。この差異を等閑視し、現実に森林を育成してきた住民を自然破壊者と考えるような保全政策は、履行にあたって大きな敵対的反応を受けるだろう。効果的な自然保護政策の基盤には、客観的事実に基づいた景観認識を利害関係者の間で共有することが重要である。

２．研究の目的

本研究課題では、村落の周辺に広がる小森林の成因およびそれら森林の増加／減少に関して大きな論争が進行中の西アフリカ・ギニア共和国の南部森林地帯において、森林の成立、維持に関する歴史的変遷と人為的働きかけのメカニズムを明らかにし、現在それらの森林が果たしている生物多様性保全上の意義および、各種儀式などの場として、伝統文化の継承・維持に寄与する意義を明らかにする。

本研究課題の調査対象地は、ギニア共和国南部森林地帯のニンバ地域である。この地域では、1976 年以来現在まで、ボッソウ村において、また、1992 年以来近隣の世界自然遺産ニンバ山において、京都大学霊長類研究所の主導でチンパンジーの総合的調査が継続して行われている。この地域は上記の森林・サバンナ遷移帯のキシドゥグ地域よりも低緯度に位置するため降水量が多く、植生タイプとしては落葉樹林の要素をある程度含む熱帯常緑林である。ボッソウ村の周辺には、丘の斜面や渓流の周囲にいくつか小さい森林パッチが散在し、野生チンパンジー集団の生息地となっている。これらの森林は儀礼の場などの文化的な機能のために神聖視され、立ち入りが禁止されることで村人により厳格に保護されている。また、ニンバ山は自然保護区として政府機関によって保護管理が行われ、法的には現在一切の経済活動が禁止されているが、歴史的には周辺村落にとってさまざまな利用の場であった。

ボッソウ・ニンバ地域の村落林の形成・維持要因については、日本でいえば「鎮守の森」にあたる宗教的・儀礼的要因に加え、過去の民族間・村落間の戦乱時に、「城壁・要塞」として機能した歴史的要因が有力な仮説として浮上した。本研究課題では、上記の仮説を踏まえ、村人による現在の景観認識を構築してきた歴史的経験及び森林自体の変遷を明らかにする。

西アフリカ地域の村落林については、そこで行われる諸儀礼の文化人類学的研究や、生息する野生生物の記載的研究が見られるのみで、その形成要因や歴史的な変遷についてはほとんど手つかずの状況である。日本において近年注目されるようになった里山をはじめとする二次的植生の意義についてはアフリカにおいては総じて関心が希薄であり、本研究計画が今後の研究をリードする先駆けとなりうる。現在の森林動態については民族や気候・植生条件の異なるキシドゥグ地域との比較も可能であり、将来的な発展の可能性も大きい。

３．研究の方法

（１）オランダ、イギリス、フランスにて、1940 年以降ボッソウ、ニンバ地域を訪れた研究者を訪ね、私蔵あるいは博物館等に所蔵されている、それら研究者が収集した資料にアクセスし、それらを分析した。

（２）ギニア共和国ボッソウ・ニンバ地域においてフィールドワークを行い、収集資料に含まれていた地理情報の現地確認、住民への聞き取り調査、森林や樹木個体についての計測調査を行った。

４．研究成果

（１）植民地期以降の映像資料の収集及び分析を行い、ギニア共和国ボッソウ・ニンバ地域の森林被覆状況の経年変化及び、ボッソウ生息チンパンジーの個体群動態について興味深い知見を得た。

森林被覆状況に関して、ライデン自然誌博物館所蔵の、1960 年代のオランダ・アムステルダム大学遠征隊が収集した資料を電子化し、主としてボッソウ村の主要な森林について、当時の被覆状況を再現した。最も規模の大きいバンの丘の森については、現在の森林被覆に比べ、60 年代は森林は丘の上部に限定され、中腹以下は耕作地になっていた。ゲインの丘の森については、60 年代当時はほぼ禿げ山状態であり、現在丘の中腹以上を覆っている発達した森林は、この 35 年ほどで成立したことが明らかになった。総じて、60 年代には現在より広範囲で耕作が行われており、80 年代以降、経済の自由化とともに隆盛となった自然保護政策の浸透により、村落周辺の森林は今日まで一貫して増加してきたと言える。この結論は、村人への聞き取り調査や 50 年代の航空写真など、他の資料からも裏付けられている。

（２）ボッソウの村人への聞き取り調査から、植民地化以前の以後の森林被覆について、（１）の結果である近年の森林被覆の回復についての裏付けを得ることができた。また、

植民地時代以前にまでさかのぼり、村の移住史や、現在観察できる村内の地形や特定の地名の由来、かつての部族間戦争に関わる戦略に関する調査を行った。

村落林の構造、とりわけバンの丘に広がる精霊の森の由来については、頂上を戦時の避難所として確保するという機能について確認できた。森林の形成史に関して鍵となる植樹の有無については、聞き取り結果が収束せず、確たる結果を得ることはできなかった。この事象については、別のアプローチが必要である。

以上の結果から、ギニア森林地域ボッソウ・ニンバ及び周辺地域における、人々の活動と森林環境との間には、深い結びつきがあることが明らかになった。また、その関係は、ギニア中部やその他の地域と連続性を持ちながら、地域の地理学的条件や民族の移住史などに依存する地域固有のものでもあった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① Yamakoshi G, Koops K. (2008) Life history profiles of female chimpanzees in Bossou over 40 years. Primate Eye 96: 305 査読無
② Yamamoto, S, G. Yamakoshi, T. Humle & T. Matsuzawa. (2008). Invention and modification of a new tool use behavior: Ant-fishing in trees by a wild chimpanzee (Pan troglodytes verus) at Bossou, Guinea. American Journal of Primatology 70: 699-702. 査読有
③ 山極寿一・竹田晋也・佐藤廉也・酒井章子・山越言 (2008)「生物多様性を理解するとはどういうことか―研究とフィールドのはざまで」エコソフィア 20: 66-79. 査読無
④ 山越言(2006)「野生チンパンジーとの共存を支える在来知に基づいた保全モデル－ギニア・ボッソウ村における住民運動の事例から－」『環境社会学研究』12 ：120-135. 査読有
⑤ 山越言 (2006)「生きもの博物誌：ヒトとチンパンジーの差は数パーセント」月刊みんぱく 30(4): 20-21. 査読無

〔学会発表〕（計４件）

① 山越言「ギニア共和国ボッソウ村における精霊の森の生態史」第 43 回日本アフリカ学会学術大会、大阪大学、吹田、2006 年 5 月 27 日
② 山越言「霊長類学にとっての人間＝ヒト問題： 野生チンパンジー研究からの視点」第 23 回日本霊長類学会大会、人類学関連学会協議会合同シンポジウム「人間＝ヒトの謎をめぐって」滋賀県立大学、彦根、2007 年 7 月 16 日
③ Gen Yamakoshi & Kathelijne Koops “Life history profiles of female chimpanzees in Bossou over 40 years” XXII Congress of the International Primatological Society. Edinburgh, UK, August 8, 2008.
④ 山越言「野生動物とともに暮らす知恵: 西アフリカ農村の動物観とチンパンジー保全」ヒトと動物の関係学会関西シンポジウム 2008「野生動物の生息地域に暮らす人々の動物観」、大阪ペピイ動物看護専門学校セミナーホール、大阪、2008 年 12 月 14 日

〔図書〕（計２件）

① Yamakoshi G. 2009. The “prehistory” before 1976: Looking back on three decades of research on Bossou chimpanzees. In: The Chimpanzees of Bossou and Nimba: A Cultural Primatology (T. Matsuzawa ed.). Springer-Verlag Tokyo, Tokyo, in press.
② Yamakoshi, G. (2006) An indigenous concept of landscape management for chimpanzee conservation at Bossou, Guinea. In (J. Maruyama, L. Wang, T. Fujikura, M. Ito, eds.) Proceedings of Kyoto Symposium 2006, “Crossing Disciplinary Boundaries and Re-visioning Area Studies: Perspectives from Asia and Africa”. Kyoto University, Kyoto, pp. 3-10.

６．研究組織

(1)研究代表者

山越　言（YAMAKOSHI GEN）
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
研究者番号：００３１４２５３

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし